

本日の学び テーマ：「その日が来たる」 テキスト：アモス9章11-15節

【理解の手がかりとして】

アモスが告げるイスラエルの問題は、繁栄の中であって貧しい人々を踏みつけて平気でいられる「むさぼり」の問題であった。その罪ゆえの厳しい裁きの預言がアモス書のほとんどである。けれども、9章11節以降にはこれまでとは正反対の「回復」の預言が収められている。そして実は、アモスの目的はここにある。

神の前にあって、不義ではなく、正義が溢れる国への再生、アモスが語る将来のイスラエル王国のビジョンが11節以降に記されている。「仮庵」(9:11)とは、イスラエルの神の救いの原体験である出エジプトの荒野生活を指している。その苦難の経験(神の救い・解放へのプロセス)を思い起こさせつつ、「昔の日のよう」(9:11)、つまり南北に分裂し複雑な関係にあった北イスラエルと南ユダの両王国が一つの民として統一されるビジョンが告げられる。また12節には確執の絶えないエドムの人々、そしてすべての国民との一致が語られている。

「イスラエルの従来 of 救いの伝承の中には、代表的なものとして『選びの伝承』がある。…この『選びの伝承』はイスラエルの人々にとって最も重要な信仰内容であった。しかし…アモスは、その『選びの伝承』を逆転させて、当時の社会的不正義の横行という現実にもかかわらず、その罪を認めようとしない人々を糾弾したのである。…普通、『自分たちだけが神によって選ばれている』という思想は、『それゆえ、自分たちは救われる』と続く。しかし、アモスにおいてはそれは逆であり、イスラエルの民は、選ばれているがゆえに、その罪はむしろ厳しく問われるのである。アモスは、まさに『選びの伝承』を逆転させている。…アモスによれば、ヤハウェの神は、決してイスラエルをエジプトの地から脱出させただけではない。他の民族にも同様に働きかけているのである。つまり、ここでイスラエルは他の民族とともに相対化され、対象化されているのである。」(並木浩一/荒井章三編『旧約聖書を学ぶ人のために』)

余談であるが、「この教会の壁に入ったひび(「破れ」)は間もなく修復されます。しかし私たちはこのひび(「破れ」)を忘れてはなりません」と1995年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の2月後、神戸教会の加藤誠牧師(当時)は説教された。私は当時ボランティアで神戸教会に寝泊まりしていた。バブル期に突貫工事で建てられた高層ビルが立ち並び三ノ宮駅周辺は震災で軒並み崩れ、高級住宅が立ち並び地域の神戸教会の壁にもひびが入った。しかし、そのひび(「破れ」)のお陰で、教会の敷居は低くなり、地域の住人、そして“ホームレス”の方々との共同生活の場となったのであった。

13節以降には祝福に満ちる大地の様子が描かれている。「耕し」が「刈り入れ」に続く様。「種蒔き」に「ぶどう踏み」が続く様。それは命がつながるプロセスである。アモスは、イスラエルの復興を(9:14)を「ぶどう畑」(同)に譬えつつ、その農夫であられる神の御手による再興を最後に告げたのである。

アモスは忍耐の人であり、神の厳しい裁きを語りつつ、その厳しさに心刺し貫かれて立ち返る人々を待ち続けたのであろう。その忍耐の向こう側には、心から立ち返り、神の祝福を受ける人々の姿、そのビジョンがあった。だからこそ彼は忍耐強く語り続けることが出来たのであろう。

「預言者イザヤが指摘したイスラエルの『酸っぱい実』は『流血（ミスパパ）と叫喚（ツェアカ）』（イザヤ5:7）でした。富める一部の者達が、権力と富を独り占めにし、貧しい人々を虐げ、卑しめていたのです。すなわち『愛の欠如』です。イザヤが嘆くこのことは、父なる神様の嘆きそのものであり、また同時にイエス様の嘆きでもありました。・・・であるが故にイエス様は言われるのです。『わたしがあなたがたを愛したように、互いに愛し合いなさい。これがわたしの掟である』（ヨハネ15:12）。・・・私たちが望むべきもの、それは私達の日頃の行いがイエス様の御心に適うものとなること、すなわち『愛』を実行する者へととならされていくことです。・・・ただ流れてくる養分を受けるだけでは、あの『死海』と同じく他の生命体が一切生きることが出来ないものとなります。ガリラヤ湖がなぜ多くの生命が生息しているのか、それは神の恵み（雨）を受けて、それをヨルダン川に流し込んでいるからです。受けた養分（愛）を分かち合っていく、主イエスのその生き様に倣うこと、至高の愛を目指して生きること、それがイエス様の弟子となっていくこと、すなわち『まことのぶどうの木につながる枝』となっていくということです。」（11月9日の相模原礼拝宣教より）

「その日」（9：11、13）が何時か私たちには分からない。しかし13-15節にある希望の将来を待ち望む。「神の国の完全なる成就の時・・・教会の歩みとは、その希望の連続だと思うのです。神の国の完成を待ち望みながら、その時が必ずや来たる、と信じて、イエス様とイエス様の言葉を誇りとして、そこに真があると確信して、ひたすらに告げ知らせしていく、そういう歩みだと思うのです。」（11月2日永眠者記念礼拝宣教より）

（聖書教育より）

「今日、アモスの鮮烈な言葉は、私たちの歩むべき、道しるべとなるのではないでしょうか。アモスや、アモスの弟子たちが望み見た『救い』は、神さまが望む『誰一人取り残されない世界』でした。」（大人クラス）